

平成26年度病害虫発生予察注意報第1号

平成26年6月13日
鳥取県病害虫防除所

注意報の概要

県西部平坦地の砂畑ほ場において、夏ネギを中心にべと病の発生が増加している。今後の気象条件によっては、急激に発病が増加する恐れがあるため、防除の徹底が必要である。

病害虫名：ネギべと病

- 1 対象作物 ネギ
- 2 発生地域 県西部
- 3 発生時期 平年並
- 4 発生量 多い
- 5 注意報発令の根拠

- (1) 本年の現地白ネギほ場におけるべと病の発生時期は平年並であったが、5月に入り発生が増加した。
- (2) 県西部における5月30日現在の平均発病株率は15.6%で、5月下旬の平年値(1.8%)と比べて高く、夏ネギを中心に発病が増加している(表1)。
- (3) 夏ネギの栽培面積の少ない県東部と中部では、6月5、6日の秋冬ネギの調査において発病は見られなかった(表2)。
- (4) 本病は、15～20℃程度で降雨が続くと発病が多くなる。気象予報によると、向こう1か月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されており、発病に適した気象条件となる可能性が高いことから、引き続き発病の増加が見込まれる。

6 防除上注意すべき事項

- (1) 現在発病が認められるほ場では、直ちにリドミルゴールドMZ水和剤1,000倍液、フォリオゴールド800～1,000倍液、プロポーズ顆粒水和剤1,000倍液、フェスティバルC水和剤1,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液などを散布する。
- (2) 発病が認められていないほ場においては、ランマンフロアブル2,000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ペンコゼブフロアブル600倍液などによる予防防除を徹底する。
- (3) 同一成分及び同系統の成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数及び収穫前日数に注意して薬剤を選定する(表3、表4)。

表1 県西部白ネギほ場におけるべと病の発生状況(5月30日調査)

地点	調査ほ場数	発生ほ場数	発生ほ場率(%)	発病株率(%)
境港市	5	3	60.0	15.2
米子市	5	2	40.0	16.0
県西部全体	10	5	50.0(12.7)	15.6(1.8)

※()内の数値はH16年～25年の5月下旬における平年値。夏ネギを対象に調査。

表2 県東部と県中部のネギほ場におけるべと病の発生状況（6月5、6日調査）

地 点	調査ほ場数	発生ほ場数	発生ほ場率 (%)	発病株率 (%)
県中部	10	0	0	0
県東部	10	0	0	0
合計・平均	10	0	0	0

※秋冬ネギを対象に調査

表3 ネギべと病の主な防除薬剤（平成26年5月30日現在の農薬登録内容）

薬剤名	希釈倍 数	使用時期	本剤の 使用回数	成分	
アリエッティ水和剤	800倍	収穫3日前まで	3回以内	ホセチル	
アミスター20フロアブル	2000倍	収穫3日前まで	4回以内	アゾキシストロビン	
ジマンダイセン水和剤	600倍	収穫14日前まで	3回以内	マンゼブ	
フェスティバルC水和剤	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	ジメトモルフ	銅
フォリオゴールド	800~ 1000倍	収穫14日前まで	3回以内	メタラキシル	TPN
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	ベンチアバリカルブ イソプロピル	TPN
ペンコゼブフロアブル	600倍	収穫14日前まで	3回以内	マンゼブ	
ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	4回以内	シアゾファミド	
リドミルゴールドMZ水和剤	1000倍	収穫30日前まで	3回以内	メタラキシル	マンゼブ
レーバスフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	2回以内	マンジプロパミド	

表4 成分ごとの総使用回数（平成26年5月30日現在の農薬登録内容）

成分名	総使用回数
アゾキシストロビン	4回以内
シアゾファミド	4回以内
ジメトモルフ	3回以内
TPN	4回以内(土壌灌注は1回以内、散布は3回以内)
銅	-
ベンチアバリカルブイソプロピル	3回以内
ホセチル	3回以内
マンジプロパミド	2回以内
マンゼブ	3回以内
メタラキシル	4回以内(種子への処理は1回以内、は種後は3回以内)